



コナン・ザ・グレート
Conan the Barbarian (1982) スブレイグ・
ド・キャンプリン・カ
ーター (野田昌宏訳)
角川書店 (新書)
(4/25刊・¥680)

幼いコナンは、村を襲った敵の群れに両親を惨殺される。敵の紋章、向かいあった二匹の蛇——蛇神を祭るドゥームの印だ。コナンは敵への復讐を心に秘め、奴隷から剣闘士へと成長していく……。

本書はコナン物の新作（もちろん新訳）である。正確にはノヴェライゼーションで、ハワードの原典が中心のノームプレス版コナン・シリーズ（早川文庫既刊）とも、ランサー版（創元推理文庫既刊）の年代記に整備されたコナンとも、直接関係はない。

巨大なる敵に立向かう、蛮人コナン——しかし、この主人公像は、やはりハードのコナンでなく、ジョン・ミリアスのコナンではないかと思う。なにせ「挑戦者」はミリアスお得意のキャラクターだ。

ハワードの設定した雰囲気は、残酷さ、超自然の力と、たしかにあるのだが、ハワードならこれほど明快に書きはしないだろう。コナンの魅力は、恐ろしく強靱な肉体と、裏に潜む暗闇への怖れという、原始的な性格付けにあった。極端な陰陽の対比が、強い印象を残した。本書のコナンは、その対照がやや弱いように感じる。